

河野哲也著 はまのゆか、こぼようこ絵
『対話ではじめるこどもの哲学—
道徳ってなに？(全4巻)』

童心社 2019年 B5変型判 各巻63頁 9000円(税抜)

得居千照(筑波大学大学院)

「道徳」では、なにを学ぶことが大事なのか。「特別の教科 道徳」の実践が始まるなか、本書は、「世の中のほとんどの問題には正解なんてない」ってことを知ること。そして、「いい子の答え」をさがすことをやめて、それぞれの「本音」をもちよって、いっしょに考えていくこと(1巻、p.5)が大事であるとし、その方法として「哲学対話」を取り上げている。

「哲学対話」とは、「みんながかんがえているぎもんについて、みんなで真剣に話し合ってみること」(1巻、p.5)である。みんなが考えている疑問。たとえば、「なんで勉強しないとイケないの？」(1巻)「友だちって多いほうがいいのか？」(2巻)など。「哲学」という言葉を聞くと「ヒゲのはえたおじさんが、眉間にしわを寄せて考えている」(1巻、p.20)様子を思い浮かべる人がいるかもしれない。しかし、著者は哲学を「真剣に「本当のことが知りたい」と思って、考えぬくこと」(1巻、p.20)とする。だからこそ、このような「生活のなかで自然と生まれてくるぎもんをじっくり考えるのも、りっぱな哲学」(1巻、p.20)なのである。

本書は、本当は気になっている疑問をめぐる、小学5年生の「だいや」や「りん」などと、猫の「メル」、犬の「レオ」との対話篇を読みながら、自分はどのように考えるのか、「いい子の答え」を探すのではなく、「自分の力で考える」ことを助けてくれる構成となっている。

本書は、全4巻である。1巻では、「自分のぎもん」が集められている。「将来の夢ってもたないでだめ？」「生きるってなんのため？」など。2巻は、「家族・友だちのぎもん」について。「なんでお姉ちゃんはがまんしないとイケないの？」「なんでいじめは起きるの？」など。3巻は、「社会のぎもん」について、「つ

いていうそってあるの？」「どうして差別するの？」などの問いが。そして、4巻には「命・自然のぎもん」として、「どうして動物によってかわいがったり、食べたりするのか？」「死刑ってあったほうがいいのか？」などが取り上げられている。それぞれの対話篇の後にはテーマに関連した別の観点からの問いが次々に提示されており、その都度、「じゃあ、きみの意見は？」と、つねにあなたに向けて問いが投げかけられる。

本書の魅力のひとつに、いろいろな読み方や使い方ができる点がある。取り上げられている「ぎもん」に興味がある人はもちろん、「ぎもん」について最初はピンとこなかった人も、対話篇や派生する問いを読むことで、いつの間にか「自分の力で考える」ことのおもしろさを実感できるだろう。学校の教室で「哲学対話」を行う際の参考にすることも可能である。また、「哲学対話」をファシリテーターとして企画、実践してみたい方にもおすすめである。

たとえば、「りん」と「レオ」の「なんでお姉ちゃんはがまんしないとイケないの？」(2巻)についての対話。姉だから我慢させられている「りん」は、「そんなのずるくない？同じママの子どもなんだから、平等にしてほしい」(p.12)と意見を述べる。あなただったら、なんと応答するだろうか。「たしかに、同じ子どもだもんね」と同意するのか。「平等ってなに？」と問いを投げかけるのか。それとも…。どのようにしたら考えを深めることができるのか、本書のコラムや対話の展開を予想したりすることで、ファシリテーションの練習にもつながると考えられる。

しかし、ここで注意したいのは、本書の対話篇が「哲学対話」の「正解」ではないことである。そもそも「正解」などはなく、実際の「哲学対話」では、沈黙があったり、話が脱線したり、時には問いが変化してしまうこともある。その場にいる参加者の対話により、すべてが変化するのである。

本書には、どのようにしたら本当のことを知るために「ぎもん」を深めることができるのか、「自分の力で考える」ためのヒントにあふれている。読者なりの読み方や使い方を見つけ、興味があれば、「哲学対話」に参加し、対話し、考えることの楽しさを体感してほしい。